

第1433回 京都市教育委員会会議 会議録

1 日 時 令和2年7月9日 木曜日

開会 10時00分 閉会 11時40分

2 場 所 京都市総合教育センター 第1研修室

3 出席者	教 育 長	在田 正秀
	委 員	奥野 史子
	委 員	星川 茂一
	委 員	高乗 秀明
	委 員	笹岡 隆甫
	委 員	野口 範子

4 欠席者 なし

5 傍聴者 10名

6 議事の概要

(1) 開会

10時00分、教育長が開会を宣告。

(2) 前会議録の承認

第1432回京都市教育委員会会議の会議録について、教育長及び全委員の承認が得られた。

(3) 議事の概要

ア 議事

報告1件

イ 報告事項

中学校及び義務教育学校後期課程教科書採択事務の現況・中間報告について

(事務局説明 文田 学校指導課担当課長)

本日は、令和3年度から令和6年度まで使用する中学校の教科書採択について、経過報告と教科書展示会の終了報告をする。

まず、5月7日教育委員会会議で「基本方針」及び「選定の観点」を議決いただき、5月18日及び6月15日に教科書選定委員会を開催した。なお、感染症対策のため、いずれも集合開催とはせず、持回り開催とし、教科別の調査研究部会においても、リモート開催にするなど、工夫しながら進めているところである。

本日は時点報告としてご説明申し上げます。

教科書展示会について、6月1日から始まり、7月1日ですべての日程を終了している。本年度は、これまでどおり法定期間の14日間を超えて約1ヶ月間実施したが、会場については、11会場で実施していたところ、感染症対策のため、小規模な図書館等での開催は見送り、法定2会場に中央図書館等の4会場を加え、計6会場にて開催した。

本年度は、閲覧者名簿に記名された方で、計260名に会場いただき、意見書は110件頂戴している。意見書の内容としては、社会科及び道徳科への意見が多く、特定の教科書への賛否、記述内容に対する意見等がほとんどである。他に、国語科、外国語科、理科、家庭科等についての意見も少数ながら頂戴しており、また、QRコードの有効活用等についての意見もあった。

続いて、この間事務局に寄せられた、市民団体等からの要望書は3件で、教科書採択の公正な手続き、特定の教科書の記述内容、教科書展示会のあり方、教員や市民意見の尊重などについて要望されているものである。いずれも、本市においては、丁寧に取り組んでいるところと考えているが、しっかり確認したいと考えている。

次に、教科書選定委員会の概要である。

感染症対策のため、第1回及び第2回ともに、持ち回りによる開催としたが、外部委員から幅広いご意見を頂戴している。主な意見としては、教科書の構成や工夫等、ノートのあり方、障害のある生徒への配慮などに加え、教科書の様々な工夫や手立てにより、生徒の主体性が育ちにくく、教師の指導の幅が狭くなってしまうことへのご質問も頂戴した。

こうしたご意見も踏まえながら、調査研究に当たっては、教員である調査研究員の意向等を大切にしつつ、今回の採択では、選定の観点で、生徒目線の選定を大切にすることとしている。「生徒にとってどのように使いやすい教科書か」ということを重視して、引き続き、調査研究を進めてまいらる。

それでは、教科ごとに各教科書の傾向等について、それぞれ担当の指導主事からご報告申し上げます。なお、本日は、教科の特性がより現れている部分について、ご説明申し上げます。

・国語科（立垣主任指導主事）

「身に付けた言語能力」が、他の文章や題材では、どのように活用できるか、また、他の教科でどのようにいかせるか、ひいては、社会生活においても、生きて働く力にすることが求められている。本日は、選定の観点4で設定している、「学びの活用への手立て」が各社でどう取り扱われているかを説明する。

東京書籍（P108, 109, 248, 249）の巻末には、国語科の学習活動を支える力を整理した「学びを支える言葉の力」というページが用意されており、その中に、「つながる・広がる」と題されたコーナーが設定されている。ここでは、生徒が、本編の小説作品「形」や「百科事典少女」などを学習した後に、そこで身に付けた力が、他の教材や、他の教科の学習、さらには、生活の中ではどのような場面で活用できるかの例が示されている。また、「書く力」を育成する教材では、「食品ロスをテーマとするポスターを批評する」といった、日常生活や社会生活に関わるものを取り上げられ、国語科で培った言語能力を生活に生かしていこうとする態度を身に付けられるよう工夫されている。

三省堂（P198, 278, 279）の教材末「学びの道しるべ」のページでは、「学びを広げる」というコーナーが設定されている。ここでは、夏目漱石の「坊ちゃん」の一部を学習した後、作品の続きや他の作品を読んで気に入った場面を紹介し合う学習活動が提案されている。生徒が、学習したことを使って他の作品を読むことを誘う文言だが、生徒が自ら本を手にする仕掛けとしてはやや弱いと考える。また、巻末の「社会生活に生かす」のページでは、メモの活用について示すページでは、上段「忘れないためのメモ」、下段の伝言メモ、スピーチメモといったように、同じメモでも目的によって何を書くかが変わることがわかるものとなっており、生徒が社会生活でどのように使い分けられるかが理解できる。ただし、各学年とも同じ内容となっており、本文との関連性も明確に示されていないため、生徒にとって使いづらい面がある。

教育出版（P200, 201, 316, 317）の「言葉と社会 1 コミュニケーションの場を考える」の教材の後に、スピーチの学習を行うが、「相手や目的に応じて、自分の使う言葉や情報の取り扱いが変わる」ことが示されている。生徒は、このページに書かれたことを参考にして、相手や場に応じたスピーチを考えることになる。また、「言葉の自習室」という資料を整理して掲載されているページの一部で、「話すこと・書くことテーマ例集」では、日常生活から社会生活へと意識を高めるための手立てとして用意している。

光村図書（P50, 51, 130, 131）の「多角的に分析して書こう」という書く力をつけるための教材では、「つなぐ」という枠組みがある。これは、「多角的に分析して書く」という力をつけたことが、日常生活の対話や会話で、また、学校生活では、他の教材や他の教科などの学習で、さらに、将来、社会生活において、どんな場面で生かせる力なのかを生徒自身が自覚しやすい手立てとなっている。同様に「話す・聞く力」を付ける教材でも「つなぐ」という枠組みが設定されている。また、「思考のレッスン 具体化・抽象化」というページの直前には、「作られた物語を超えて」と題された「説明文」が掲載されており、その説明文は、「具体的な根拠」を基に、筆者の抽象的な主張が書かれているが、そのような読み取りをしたあとに、その書かれ方を、生徒自身がどのように使えばいいかが分かるという内容になっている。

このように、各教材で付けた力が、どのような場面で生かせるものかが適切に示されているため、生徒自身が、生活や学習の基盤となる言語能力を身に付けていることを確認できるという工夫となっている。生徒が、自らが身に付けた力を自覚し、目的や場面によって活用する力を育むために、よく工夫されていると考える。

<書写>

国語科と同じく選定の観点4で設定しており、書写での学びを、国語科をはじめとする他の学習や場面と関連付ける工夫について、各社でどう取り扱われているかをご説明申し上げる。

東京書籍（P64, 65, 78）の、「本のポップを書こう」では、国語の授業において「本を紹介する文章を考える」という言語活動をすることは多いが、学習後、「自分が考えた文章」を効果的な伝え方を考えるという活用学習となっている。また、「平家物語」の古文が行書で書かれたものが掲載され、なぞり書きをする学習が用意されており、各学年に1作品ずつ、学年にふさわしい教材が掲載されている。また、2つの輪がつながっている「国語」と書かれたマークは、国語やほかの教科等と関連のある教材であるということを示しており、生徒が他教科との関連を自覚しやすくなっている。

三省堂（P48, 49, 62, 63）の「グループ新聞を作ろう」という学習活動では、国語科で身に付けた、「情報を集め、目的によって検討、整理」という力を活用する学習となる。国語科の教科書と関連した「いろは歌」や「枕草子」の一部が行書で掲載されており、古文をなぞり書きする教材が、1年生、2年生において1作品ずつ、学年にふさわしい教材が紹介されている。

教育出版（P36, 37, 72, 73）は、「学校生活に生かして書く」という教材で、おすめの本の帯やポップ、ポスターを作るという学習活動が掲載されている。教育出版でも、国語科の授業での学びを活用して生徒が学習活動に取り組むことができるように工夫されており、国語科の教科書と関連した文章として「走れメロス」の一部が掲載されている。また、東京書籍、三省堂と同様に、平家物語や枕草子といった古文の名作についても掲載されており、教科書と関連させた文章について学習する教材は、先の2社より、やや多くなっている。

光村図書（P64, 65, 104, 105）でも、国語の授業と関連した教材が用意されている。「私の好きな言葉」という教材で、3年間の学習を振り返るものとして設定されている。光村図書でも、他社と同様に、国語科の教科書と関連が図られている教材が取り上げられているが、定番教材の「平家物語」や「枕草子」に留まらず、「季節」ごとの和歌や俳句、時候の言葉など、取り上げられる文章、字句が豊富で、生徒がいろいろな教材で国語科の学習を実感しやすいよう工夫されており、優れている。

・社会科（森首席指導主事）

地理的分野、歴史的分野、公民的分野、地図の4種があり、分野別に特長等をご説明申し上げます。

<地理的分野>

新しい学習指導要領では、持続可能な社会づくりの観点から、「世界の諸地域の学習」における地球的課題の視点を取り入れることになっている。そこで、「選定の観点4」の世界の諸地域における地球的課題、「観点5」の持続可能な社会の形成に関連して、各社ごとの特長を説明する。

教育出版（P80, 81）世界の諸地域「ヨーロッパ州」の学習のまとめのページは、ヨーロッパではなぜ国々の結びつきが強まったのかをテーマに、学習後に取り組むものである。EUの課題として、スペインのカタルーニャ地方の独立運動の難しさについて考える読み物資料を用意しており、振り返り活動が設定されている。「環境問題」を地球的課題として取り上げているが、再生エネルギーについて1カ国調べるだけにとどまっている。

日本文教出版（P70, 71）の国境を越えた統合をテーマに学習した後のまとめのページでは、「統合の影で進む分離の動き」を地球的課題の視点としている。そして「チャレンジ地理」としてイギリスのEU離脱の賛否の意見をもとに、自分なりに考え判断する活動を設けている。これまでの学習内容をもとに、地球的課題を切り口により深く考えることができる。ただ、持続可能な社会づくりまでは踏み込まれていない。

東京書籍（P86, 87）では、ヨーロッパの統合について話し合いながら、統合のきっかけ、影響、課題を整理し、統合を進めるべきか否かを判断する場面が設定されている。日本文教出版では、1国の離脱の賛否を質問していたが、この教科書では、

ヨーロッパとして統合を進めるべきかを問い、考える際の立場の違いが見られたところである。

帝国書院（P80, 81）では、注目する地球的課題として「経済格差」をキーワードにしており、表をもとに、統合による効果と課題について、項目ごとに整理していくこととなる。そして、ステップ2で統合による影響について、「経済格差」の語句を使って説明することが求められており、さらに、ステップ3では、経済格差の要因を考え、格差を小さくするための取組を考え、どの取組を優先していくのか話し合う活動が設定されている。地球的課題を視点に持続可能な社会づくりに向けて考えるとところまで具体的な活動が設定されており、優れている。

<歴史的分野>

考察する力や説明する力の育成が一層求められている。そこで、「選定の観点4」の考察する力、説明する力を育成するための工夫、歴史の流れを大観し、各時代の特色を捉えるための工夫に関して、章末の学習のまとめのページをもとに、各社ごとに説明する。

山川出版の（P152, 153）「近世の日本」の学習のまとめとなるページでは、近世とはどのような時代だったのか、流れに従ってこれまでの学習を振り返っていき、この時代を政治や社会、世界とのつながり、経済などいくつかの面から多面的に考察できるよう、工夫されている。説明する課題にも取り組み、時代の特色を捉えることができる。ただ、年表等がないため、「流れを捉える」という意味では、生徒によっては捉えにくい。

学び舎の（P134, 135）まとめのページでは、年表でおもな人物を復習し、時代の様子を振り返りながら歴史上の人物にインタビューをして記事を書く活動に取り組む。生徒が興味を引く工夫となっているが、その時代の様子や特色がしっかり捉えられていないと、少し難しい。

教育出版（P142～144）では、年表を見開きで広くとり、時代の流れが捉えやすくなる工夫をしており、地図や図で学習内容を整理できる。また、当時描かれた絵をもとに、前の時代と比較しながらどのような時代だったか考察を深め、言葉で説明することを求めており、考察・説明する力を育成するための工夫がみられる。

育鵬社（P152, 153）では、年表で、その時代の流れやおもな人物、できごとが整理でき、年表で時代の流れを大きく捉えやすくなっている。特徴的なのは、その時代で最も重要だと思う人物を選び、理由とともに書く、というものである。どのような時代で、その人物がどのような影響を与えたかを考えて書かなければならず、単に人物名を答えるのではなく、考察する力、さらにその理由を説明する力を養えるよう工夫されている。

日本文教出版（P156, 157）では、年表と地図を使って時代のおもなできごとを整理することができる。幕府の収入に注目し、この時代の特色にせまる活動が設けられている。生徒が、学習の流れで示されたステップに沿って、資料を活用しながら時代の特色について考察できるよう工夫されている。最後には、近世の特色を言葉で説明する場面を設け、説明する力を付けるための工夫もみられる。

東京書籍（P146, 147）では、年表や地図による振り返りのページとは別に「まとめの活動」を設定している。その時代の特色をより深く考察していくために、思考ツールを活用した活動が示されている。学習してきたことをもとに、考えを整理し、

時代の特色を言葉で説明しまとめるといったように、考察する力や説明する力を育成するための工夫がみられる。

帝国書院（P146, 147）では、年表でおもな人物やできごとが復習できる。特長的なのはイラストで、章の導入で描かれている大きなイラストの一部を切り取ったものとなっている。学習前に見たイラストを章の学習後に再度眺め直し、比較してこの時代の変化に気付かせるよう工夫されている。また、章の問いを解決するための活動がステップごとに設定されており、流れに沿って、生徒自身が自分で見方・考え方を働かせながら、この時代の特色を言葉でまとめることができるよう構成されている。

< 公民的分野 >

「選定の観点5」をもとに、よりよい社会の実現を視野に現代社会に見られる課題を主体的に解決しようとする態度につながる工夫について、特集ページの扱いを例に、各社ごとに説明する。

自由社（P198, 199）の、国際社会の単元の国際社会の課題解決に向けて、国際平和をどう作り上げるかを考える特設ページでは、これまで地理や歴史、公民で学習してきたことをもとに考えを深めていく。意見や問いの一部にやや引っかかりを感じる記述もあるが、国際平和の実現に向けた課題を、生徒が主体的に解決していこうとする態度につながる工夫がされている。

育鵬社（P164, 165）の経済分野の学習後に設定されている「これから」のページでは、コンビニに共通の課題として、食品ロスや海洋プラスチック問題など、今、話題となっている課題を取り上げ、これからの社会に求められる企業像を考える活動となっており、持続可能な社会づくりに向かう意識を高めることができる。

教育出版（P30, 31）の現代社会に関する学習の中で、地域のルールについて考える活動が設定されている。ゴミ収集所を新たにどこに設置するか、話し合いながら提案書をつくり、地域住民としてよりよい社会づくりに向けた意識を育む工夫となっている。

東京書籍（P122, 123）の政治分野の学習をした後の「まとめの活動」のページでは、市長になって条例を作ろうという活動が設定されている。ステップチャートで理想のまちを考え、市の課題を踏まえてその解決策をグループでまとめ、それを条例案として示す流れである。地域の課題を解決しながらよりよい地域の実現に向かおうとする態度の育成につながる工夫となっている。

帝国書院（P163, 164）の特設のページでは、実際の社会に見られる赤字バス路線について、税金の使い道をどうしていくか考えていく活動が設定されている。様々に想定された市の状況の資料をもとに、住民の対立する意見を踏まえて考えていく。その中で、対立と合意、効率と公正といった社会の見方・考え方を働かせながら、持続可能な社会参画意識を高めながら課題解決を図ろうとする姿勢を養うための優れた工夫となっている。

日本文教出版の（P74, 75）「チャレンジ公民」の特設ページでは、実際の社会に見られる課題として、道路拡張計画に伴い住民の立ち退きが求められる事例がある。何が対立しているのかを明らかにし、地域住民の意見を踏まえて、これまで学習した人権とのかかわりを考え、さらに合意に向けて考えを深める場面が設定されている。どのように説得するか、実際に起こり得る状況の中でその解決に向けた方法を

考えていくことになり、よりよい社会の実現を視野に現代社会に見られる課題を主体的に解決しようとする態度につながる優れた工夫となっている。

日本文教出版と帝国書院では、このような社会参画意識を育む活動が章のまとまりごとに効果的に設定されており、大変有効であると考ええる。

<地図>

地図は、「選定の観点4」をもとに、世界の諸地域に関する地理的認識を養うための工夫について、各社ごとに説明する。

東京書籍（P37, 38）の東アジアのページでは、テーマ資料から中国を中心とした東アジアの様子を読み取ることができる。多くの資料が充実しており、写真資料も交えて視覚的にも地域の姿が捉えやすいよう工夫されている。写真や歴史に関する資料が取り上げられている点が特長である。

帝国書院（P27, 28）の東アジアのページでは、地図中の色分けが鮮明ではっきりしており、見やすくなっている。また、「地図活用」のコーナーが設けられ、地図を読み取る際の視点が具体的に示され、生徒が地理的な認識を深められるよう工夫されている。さらに、世界の中の中国の様子が捉えられるとともに、「日本との結び付き」のグラフから日本とのつながりもつかめるようになっており、優れている。

・数学科（田中副主任指導主事）

社会生活などの様々な場面において、必要なデータを収集・分析し、その傾向を踏まえて課題を解決したり意思決定をしたりすることが求められており、新学習指導要領においても統計的な内容の改善・充実が図られている。そのため、本日は「選定の観点5」の「データを収集・分析することを通して課題を解決したり、意思決定をしたりするための工夫」についてご説明申し上げる。

東京書籍（2年：P178, 179, 183, 184）では、ヒストグラムを比較することで傾向分析する1年生の学習について、その分析を今回の改定で新たに2年生の学習内容となった「箱ひげ図」を活用することで、系統的に複数の資料を比較しながら考えていくことができるよう工夫されている。

大日本図書（2年：P208, 209）の巻末「MATHFUL」のページにおいて、体温計のグラフや、平均気温と桜の開花日の関係のグラフを掲載し、短時間や短期間のデータや実際のデータを活用することで、生徒が未知の時間の体温や表にない地域の開花日を予想できることに気付けるよう、工夫されている。

学校図書（1年：P251）では、データの活用領域において、青色の背景で示されているPPDACサイクルに沿った課題解決の方法に触れ、生徒がデータの効果的な分析方法を知るとともに、右端の列の人物キャラクターの対話を通して、批判的に考察する場面を繰り返し設けることで、資料を比較しながら考えることができるよう工夫されている。

教育出版（1年：P260, 261）では、通学時間のデータを用いてその傾向を捉える課題で、全体を通して生徒同士の会話をもとに課題解決を進める形にするとともに、その会話の中にデータを比較するセリフを多く設定し、さらに、他にも活用できそうな表やグラフをヒントとして挙げ、それらを比較することで、より適切な分析ができることに気づけるような工夫がされている。

新興出版社啓林館（1年：P216, 217, 224）では、データの活用領域において、「疑

問 1」で提示された課題を様々なデータを比較しながら分析・検討し、結論を導いた後、「疑問 2」を提示し、「疑問 1」で学んだ手法を活用して、別の課題を検討するという PPDAC サイクルを繰り返し行うスパイラルな構成となっている。生徒が論理的な問題解決方法を学ぶだけでなく、新たな課題で活用させることにより、さらに学びを深められるような工夫が優れている。

数研出版（2 年：P172, 173）では、章を通して、「Q」で示された 1 つのデータに基づき展開する構成で、キャラクターのセリフをヒントに小学校で学んだ内容も含めた様々な表やグラフを活用し、比較しながら課題解決に向けた学習が進められるよう工夫されている。

日本文教出版（1 年：P244, 245, 2 年：P172）は 1 年生の学習で、「手順」のように PPDAC サイクルをわかりやすい言葉で示し、批判的に考察しやすくしている。2 年生では、その方法を活用しながら、箱ひげ図を比較してデータを分析する教材を扱うなど、3 年間の学習を系統的につなげ、生徒にデータ分析に関する様々な方法が身に付くような構成とするなど、優れた工夫がされている。

・理科（湯浅主任指導主事）

新学習指導要領では、生徒の資質・能力を育むために、「探究の過程」を重視しており、今回は、「選定の観点 4」の「自然の事物・現象を科学的に探究しようとする態度を身に付けるための学習過程の工夫」について各社の特徴をご説明申し上げる。

東京書籍（1 年：P30, 31, 218, 219）について、各節冒頭は「レッツ スタート！」と称した問題発見から始まり、観察へと続く探究過程が細かく記載されるが、ページ数の右隣に探究の過程が見通せるフローチャートを示し、色分けをすることで、該当ページの学びが、探究活動のどの位置づけになるのかが一目で確認できるよう工夫されている。学習内容によって探究の過程が変わる場合にも対応しており、生徒が探究活動をより明確にとらえることができる優れた工夫がされている。

大日本図書（1 年：P26, 27）では、「問題を見つけよう」や「？」で章の課題を大きくとらえ、「実習」では、目的、着眼点など課題をとらえやすくし、さらに「結果の整理」や「結果から考えよう」をそれぞれ分けて提示することで、探究過程を明確にする工夫がされている。

学校図書（1 年：P32～35）では、探究過程をひとつひとつの観察・実験で理解しやすいように、バインダーに見立てたレポート形式の表示の中で、「気づき」から「計画」、「観察」から「考察」までの流れを明示することで、生徒が順序立てて探究活動を進めることができるよう工夫されている。

教育出版（巻頭④, ⑤, P22, 23）の「探究の進め方」は、折込式となっており、広げると各単元のページと合わせて学習することが可能となっている。各単元内においても同じマークを使用し学習の見通しを持てるように配慮されているが、必ずしも探究の流れが巻頭ページの折込みと同じでないことや、「実習する」のように、進め方ない表現が出てくるなど、やや統一性に欠ける構成となっている。

新興出版社啓林館（P18, 19）では、黒い「？」マークの部分に課題が明示され、「観察 2」のように、「目的」から「考察」まで探究過程が示されている。このように学習活動で特に観察・実験などを要する部分は、すべてこの記載方法で統一され、生徒が探究活動の過程を理解しやすい工夫がされている。また、観察・実験におい

ては、「探究のふり返し」が示されており、生徒が仮説や計画の妥当性を吟味したり、新たな課題を探したりして深い学びにつながるような工夫がされている。

・外国語科（寺西副主任指導主事）

聞くこと・読むことで得た情報や考えを整理し、話すこと・書くことで発信する活動に取り組み、外国語によるコミュニケーション能力を総合的に高めることが求められている。そのため、選定の観点4「複数領域を統合的に活用して行う言語活動」について、各社の工夫や手立てを説明する。

東京書籍（2年：P118～121）の「Stage Activity 3」として町紹介を英語で行う小単元の「目的場面状況」では、活動に取り組む目的や場面、状況等が明確に示されており、Step1の音声によるALTからの依頼も意識して活動に取り組む工夫がなされている。Step4では、グループで作成した情報カードを活用して、ALTにおすすめの場所を伝える活動である。資料をもとに英語で発話する工夫がなされており、優れている。

開隆堂（2年：P40～43）の「Our Project 4」として夢の旅行を提案する小単位では、モデルスピーチを聞き、内容を理解しながらスピーチ作成へのイメージを深めることができる。ただし、活動の目的、場面、状況等は設定されておらず、相手意識をもって取り組むには課題が見られる。「Go」は、グループでスピーチと質疑に取り組む活動で、スピーチについて対話的に振り返る工夫がされている。

三省堂（2年：P88～90）の「Project 2」として修学旅行のプランを提案する小単位では、活動の目的、場面、状況等が示されている。図表等から必要な情報を読み取る工夫もあり、優れている。また、スピーチのための企画書を作成する活動が設定され、「Tips for Writing」では、企画書へのアドバイスも示されており、生徒にとって使いやすいと思われる。

教育出版（2年：P86, 87）の「Project 2」として訪れたい名所を紹介する小単位では、モデル文を参考にしながら名所の紹介につなげている。ただし、活動の目的や場面、状況等が示されておらず、相手意識をもって取り組むには課題がみられ、また、メモをもとに英語を書く活動が設定されているが、活動の振り返りや書くことに対する支援が十分であるとは言えないものとなっている。

光村図書（2年：P48, 49）の「You Can Do It!」として自分の町の観光プランを提案する小単位では、活動の目的や場面、状況等が示され、「Reading」で示された2人の紹介文を読む意味付けがなされている。単にモデルプランを発表するだけでなく、他のグループとの比較で自分たちの取組を振り返る工夫がされている。

啓林館（2年：P46, 47）の「Project 1」としてホームページに掲載する学校紹介を作成する小単位では、学校紹介を読むことで自分たちの活動につなげる工夫がされている。ただし、活動の目的や場面、状況等が示されておらず、相手意識をもって取り組むには課題が見られ、また、紹介文を書き、発表する活動が設定されているが、振り返りの工夫に欠け、生徒が自己評価をする際に使いづらいものとなっている。

○音楽科（水谷指導主事）

<一般>

歌唱・鑑賞などの「一般」と楽器に関する「器楽」の2分野である。まず、「一般」について、「選定の観点4」の「音楽的な見方・考え方を働かせやすい教材」の視点で、鑑賞曲「ボレロ」の各社の取り扱いを例にご説明申し上げる。

教育出版（2・3年上巻：P30, 31）では、「主題A」「主題B」として2つのメロディーが楽譜で示され、繰り返される部分に楽器の名前が予め文字で示された表の中に主題A・Bどちらのメロディーが流れたかを聴き取って、気付いたことを記入していけるよう、ワークシートが用意されている。これにより、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせ、2つの主題が繰り返される中で楽器の音色や響き、強弱などを聴き取って、曲全体の構成を考えることができるよう工夫されている。

教育芸術社（2・3年下巻：P38, 39）では、2つのメロディーが「旋律A」「旋律B」として示され、「旋律A」の下に、一曲を通して繰り返される2小節の小太鼓のリズムが楽譜で示されている。さらにその下に「演奏している主な楽器」が図示され、どちらのメロディーが演奏されているかを「旋律A, B」と同じ色で示すことで、生徒が視覚からも音楽をとらえ、楽器と音色を結びつけて聴き取れるよう工夫されている。また、楽譜を見ながら聴くことやリズムを打ってみる活動を行うことで、生徒が旋律や音色、リズム、強弱を知覚・感受しやすくなり、一曲を通して音楽的な見方・考え方を働かせて曲の構成や特徴に気付くことができる優れた工夫がされている。

<器楽>

「選定の観点4」の「音や音楽、音楽文化と豊かに関わるための表現領域と鑑賞領域の適切な関連」の視点での各社の工夫をご説明申し上げる。

教育出版（P4, 5）では、リコーダーの姿勢・かまえ方、各部の名称、指穴の番号と指番号などが図示も含めて示され、ギターや他の楽器の学習においても知識・技能を身に付けるための記述は豊富である。また、教科書巻末の「名曲旋律集」では「一般」の教科書に扱われている鑑賞曲に関連する楽曲が取り上げられ、主にリコーダーで演奏できるようにまとめられ、鑑賞との関連が図られている。

教育芸術社（P32, 33）では、「ギター」という楽器の名前の下に、「ギターの演奏を聴こう」として、その楽器に関連する楽曲の紹介があり、鑑賞と関連付けた学習が進めやすく、生徒が鑑賞で学んだ知識を表現に生かしたり楽器の音色や奏法のイメージを持ったりしながら学習に取り組むことができる。また、クラシックギター以外の種類のギターの紹介や、写真でギターの様々な演奏の紹介があることで、生徒が日常生活や社会と音楽文化のつながりを意識して学習に取り組むことができる。

・美術科（桝本指導主事）

表現と鑑賞の活動を相互に関連させて、表現したり鑑賞したりする資質・能力を育成することが求められている。「選定の観点5」の「表現と鑑賞の関連を図る手立ての工夫」について、各社の特徴をご説明申し上げる。

開隆堂（2・3年：P72, 73）では、「パッケージ制作のヒント」としてアイデアを出す視点が示され、生徒の発想や構想のヒントとなるよう工夫されている。これらの視点は鑑賞の視点としても扱うことができるが、「学習の目標」の内容が表現中心で構成されており、鑑賞と関連する視点がなく、題材の写真からパッケージの構造の全体像を読み取りにくいことなど、生徒が表現と鑑賞の関連づけを考える

手立てが弱いと考えられる。

光村図書（2・3年：P70～73）にある各都道府県のパッケージは、形、構造、図柄などを比較しながら多様な視点から捉えることができるようレイアウトされ、デザイン構想に必要な知識を習得できるよう工夫されている。また、「表現」では、鑑賞での学びを生かし、他者との対話を通して構想を深め、生徒同士が「土産パッケージを考える」という共通のテーマで異なる視点で考え、表現と鑑賞を相互に関連させながら学習を深める過程が示されている。さらに、「鑑賞」では、パッケージの他、様々な作品が紹介され、題材のテーマである「地域の魅力を伝える」デザインについて、学びが深まるよう優れた工夫がされている。

日本文教出版（2・3年下巻：P38, 39）では、水のペットボトルの写真とその下の緑色の吹き出しの「造形的な視点」の記載内容を意識して鑑賞することで、素材の特性を生かしたデザインと作者の意図に気づけるよう工夫されている。また、「お菓子のパッケージをつくってみよう」では、鑑賞の活動から得た知識や気付きを活用し、「調査、構想、発表」の活動を通して、表現と鑑賞を相互に関連づけながら学びを深められるよう工夫されている。

・保健体育科（出野指導主事）

主体的・協働的な学習活動を通して、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することが求められている。「選定の観点5」の「日常生活に関連が深い教材」や「健康に関する課題」を発見・解決する学習方法が取り上げられている「傷害の防止」の単元について、各社の特徴をご説明申し上げる。

東京書籍（P62, 63）の「活用する」では、課題を自分で考え、解決に向けて学習したことを振り返り、発表する活動を展開し、さらに「広げる」の活動を通して、数人のグループで話し合う中で解決方法を考える「ブレインストーミング」等の学習方法を活用し、生徒のコミュニケーション力や思考力を高めながら、具体的に課題解決を図る活動が可能となるよう工夫されている点が優れている。

大日本図書（P90, 91）では、資料が複数提示され、「やってみよう」などの活動において、それぞれの資料を参照しながら、課題解決に向けて、主に「考えていく」活動が展開できるよう設定されている。さらに「活用して深めよう」では、個人で「考える」ことに加え、話し合い活動も可能となるよう課題設定されていることで、生徒のコミュニケーション力を育成しつつ課題解決を図る活動が工夫されている。

大修館書店（P98, 99）では、「課題をつかむ」の部分で課題を自分で考え、グループで意見交換する活動が取り入れられ、「学習のまとめ」では、日常生活の中で起こりそうな事例に関して、その解決方法について学習内容を参考にしながらグループで話し合う活動を展開する設定とすることで、生徒のコミュニケーション力や思考力を高めながら、具体的・論理的に課題解決を図ることができるよう工夫されている点が優れている。

学研教育みらい（P108, 109）の「考える・調べる」では、生徒自身が課題を考え、考えたことを基に話し合う活動が設定され、「まとめる・深める」では、日常生活の中で起こりそうな事例に関して、学習内容を参考に自己の考えをまとめ、話し合い活動に発展できるよう構成されており、生徒同士がコミュニケーションを図りなが

ら具体的・論理的に課題解決を図ることができるよう、優れた工夫がされている。

・技術・家庭科 技術分野（深尾主任指導主事）

ものづくりやプログラミングなどの活動を通して、技術がどのように最適化されているのか考えることが大切である。「選定の観点4」の「日常生活や社会における技術に関わる問題を発見し、解決策を構想したり、実践を評価・改善する」という、いわゆる「技術の最適化」について各社の特徴をご説明申し上げる。

東京書籍（P9～11, 88, 89）では、ページ中心部に大きな穴を開けた「最適化の窓」があり、生活や社会における技術の工夫を見つけ、「技術の見方・考え方」の捉え方について紹介しており、3年間の学習を通して必要な時に振り返ることが可能となっている。「最適化の窓」を見開いたページでは、現代・未来の「技術の最適化」の具体例が示されており、生徒にとって興味深い内容となっている。また、「発見！技術の最適化」において、24時間搾乳システムや稲の品種改良などの内容を例に、技術の最適化について考えられる構成となっており、この「発見！技術の最適化」を4つの領域のすべての導入で設定することで、生徒が技術の見方・考え方を働かせ、技術の工夫について繰り返し考えられるよう優れた工夫がされている。

教育図書（P112, 113）では、「もっと知ろう」の中に、切り花用のヒマワリやネットメロンなどの品種改良が紹介されており、既存の技術を再検討し、環境負荷などあらゆる要素のバランスをとって、技術改良されている工夫を紹介するページはあるものの、「技術の最適化」の概念に関して直接説明されているページは見当たらない。

開隆堂（P52, 53, 134, 135）では、「トレードオフと最適化」について取り上げ、技術の最適化について図版や写真等で生徒にわかりやすく紹介されている。また、「トレードオフ」のマークの下に掲載されている図では、トマトの苦手な人にも食べてもらえるように、どのように栽培したらいいのか工夫して、問題解決していく事例が紹介されるなど、生徒がトレードオフと最適化について学習できるよう工夫されている。

・技術・家庭科 家庭分野（島指導主事）

家庭・地域の生活から問題を見い出し、よりよい生活の実現に向けて課題を解決し、生活を工夫する力の育成を目指している。「選定の観点5」の「生活の課題と実践」の学習内容について、特徴的な内容をご説明申し上げます。

東京書籍（P8, 9, 272, 273）では、3年間の学びのスタートであるガイダンスにおいて、イラストや文章、キャラクターの吹き出しなどを用いて、生徒が主体的に課題を発見し、他者の意見にも耳を傾けながら課題を解決し、改善していくことが生活をよりよくしていくことに繋がるという問題解決的な学習の進め方について示している。また、家庭科の学習を進める際の視点である「見方・考え方」の捉え方についての説明がイラストとともに掲載されており、「見方・考え方」を働かせて繰り返し確認しながら学習が進められるよう工夫されている点が優れている。他にも、「リンク 生活の課題と実践」マークを辿ることで、「課題の決め方」や「まとめ・発表の仕方」等の手順を具体的な事例を基に確認することができるよう配慮されている。

教育図書（P4，5）では，課題解決学習についての説明があり，その学習の進め方が掲載されています。問題発見から実践・発表にいたるまでの学習活動の欄には，それぞれ具体例が掲載されており，キャラクターの吹き出しから，学びを生活に生かすことが「自立」につながることを示されている。また，「A 家族・家庭生活，B 衣食住の生活，C 消費生活・環境」の学習内容ごとに課題への取り組み例が紹介されており，生徒がページを辿って確認する中で，学びが生活のどの場面に繋がっているのか確認できるよう工夫されている。

開隆堂（P268，269）では，キャラクターの吹き出しから課題を設定する際のアドバイスが表示されている。また，「①生活をみつめる」から「⑥生活にいかす」にいたるまでの問題解決的な学習手順のポイントが示されており，生徒が計画的に学習を進めることが出来るように工夫されている。また，まとめるためのメモの仕方やプレゼンテーションソフト，ポートフォリオ等を用いて，実践したことを相手にわかりやすく伝えるための様々な方法が紹介されており，生徒が自分の課題を設定し，発表する際の手助けとなるよう工夫されている。

・特別の教科 道徳（角田指導主事）

生命の尊厳や情報化への対応等の現代的な課題について，各社ともバランスよく教材配置されているが，各社の教材の内容に応じて，比較しながら，その特徴等について，ご説明申し上げます。

まず，いじめ問題について3社の工夫等を説明する。

東京書籍（2年：P31，32）では，いじめの構造の複雑さゆえ解決の難しさが語られた上で生徒一人一人が自分の「心」と向き合い，「答えなくてもいいから考えてほしい」「この経験について話し合うことはしない」として，差別や偏見のない態度や，お互いを認め，受け入れることについて深く考えるよう促している。このように，自分も含めて誰もがいじめの加害者になりうることに気づき，自分に向き合う教材が，複数組み合わせた形で用意され，多面的に考えられるよう構成されている点が，優れていると考えている。

日本文教出版（1年：P30，31，34，35）では，いじめの被害者は次々と出てきてしまうことに対する問題提起がされ，特設ページで，いじめの関係が一定ではないことなどについて，自分事として深く考えられるよう工夫されている。本書も東京書籍と同様，いじめ問題について教材とコラム等を組み合わせる構成が特長だが，例えば，1年生に3ヵ所も設定されるなどバランスに偏りがみられる。

廣済堂あかつき（1年：P40，41）もいじめ防止が最も重視されている。教材とコラムを組み合わせるなど，東京書籍や日本文教出版と同じ形態をとっているが，特別な工夫などは見られない。

次に伝統文化を重視した2社の工夫等を説明する。

教育出版（1年：P88）では，直前に防災について考える教材とコラムを読んだ上で，この教材と併せて，自然と共にどう生きていくかを考える学習の流れが作られている。東京書籍と同様，複数教材を組み合わせる多面的に考えられるよう工夫されている。

日本教科書（2年：P46，47）も伝統文化に関する教材が豊富なことが特長だが，特に目立った工夫はみられない。

次に社会参画と情報モラルを重視した2社についてである。

光村図書（3年：P92～95）の「社会の一員としての自覚について考える」という教材では、差別や偏見のない社会には、それぞれの背景を尊重することの大切さについて考えた後、特設ページ「深めたいむ」で、「あってよい」「あってはならない」と具体的な違いについて、話し合い、さらに、次の特設ページ「世界の子供たちの状況」も併せて、重層的な学びができる構成されている。本書はこのように、全ての教材が関連性の深いもの同士結び付くように配列されているのが特徴でよく工夫されている。

学研教育みらい（1年：P26, 27）では、噂をもとに相手のことを決めつけてしまうことの是非が問われている。「深めよう」では、SNSの会話の問題点を発見した上で、偏見を持たずに相手と付き合っていくために必要なことは何かを考える活動が設定され、段階的に思考を深められる。本書はこのように、情報モラルについて系統的に学びを深められるよう工夫されているのが特徴となっている。

道徳科は7社あり、数社を除き各社の特徴にあまり大きな違いがないが、引き続き調査研究を続け、生徒たちに使いやすい手立てを見極めてまいりたい。

以上、9教科からの報告である。まだ調査研究の途中段階であり、今後さらに詳細な調査研究を行ってまいらる。

最後に、今後のスケジュールを申し上げる。次回の選定委員会は近日中に開催する予定をしている。なお、次回の選定委員会は、感染症対策を行ったうえで、選定委員の皆様には集合していただき開催するよう考えている。選定委員会の協議内容については、改めて、教育委員会にご報告させていただく。最終8月中には、使用教科書について最終の審議・採択をいただきたい。

（委員からの主な意見）

【教 育 長】新学習指導要領に準拠した教科書採択であることを踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、重視されている点や特徴的な部分について調査研究の状況はどうか。

【事 務 局】新学習指導要領では、知識の習得を重視した教育を見直し、習得した知識を活用・応用し、問題発見・解決する能力を育てることが求められていることから、資質・能力の育成に向けた教科書の工夫が見られる。また、生徒が自ら問題を発見し、自分の考えを深めるための設問として、考える視点や、着目点である見方・考え方をわかりやすく示すなど、各社で工夫が見られる。

【野口委員】教科書の中の設問は、生徒に考えさせる内容が多く、中には、大人でさえ記述が難しいと感じる設問も見受けられた。諸外国と比較して、日本の児童生徒は、自己表現やプレゼンテーションが苦手な傾向があるため、授業の中で自己表現等をできる機会を提供することが大切である。こうした機会を、教科書等を活用しながら、学習指導の中で組み込んでほしい。

【事 務 局】国語科、社会科での多面的に読み取る力、考察する力や説明する力に加え、英語科においては、既習事項を活用して、英語で即興的にやり取り

する活動の中で考えをまとめ、発表する力が求められている。こうした力を身に付けられるよう、各教科書では構成等の工夫がなされており、採択後においては、使用教科書の研究も進めながら、授業改善に向けて、引き続き取り組んでまいりたい。

(4) その他

○教育長から、前会会議以降の主な出来事等について報告

6月29日～ 中学校部活動の通常活動再開

7月6日 予算特別委員会第2分科会

7月7日 教育福祉委員会

7月8日 大雨の影響等による臨時休業（終日休校：5校，午後から授業実施：7校）

7月8日 令和3年度京都府公立高等学校入学者選抜におこえる学力検査問題の出題範囲の削減の広報発表

○事務局から当面の日程について説明

(5) 閉会

11時40分，教育長が閉会を宣告。

署 名 教育長